

前 奏 黙想	祈 禱
招 詞 ガラテヤの信徒への手紙 3:28	讃 美 歌 352 あめなるよろこび
讃 美 歌 1 神のちからを	献 金
祈 禱	讃 詠 547 いまささぐるそなえものを
信仰告白 使徒信条 566	黙 禱
聖 書 申命記 5:12~14	主の祈り 564
マルコによる福音書 3:1~6	頌 栄 540 みめぐみあふるる
讃 美 歌 347 心にしのぶも	祝 禱
説 教 『安息日に起る奇跡』	後 奏

「安息日を守ってこれを聖別せよ。あなたの神、主が命じられたとおりに(申命 5:12)」。安息日はいったい何のためにあるのか。「主の安息日であるから、いかなる仕事をしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、牛、ろばなどすべてのすべての家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。そうすれば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる(5:14)」。

奴隷や寄留者、家族や家畜、命あるすべてが「主人と同じように休む」ことのできる安息日。まさにイエスが「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない(マルコ2:27)」と喝破している通りだ。ところが世の常として、掟はやがて定式化し、元来の「御心」は後退していく。

とはいえ緊急時には、人や家畜のために安息日を破ることが認められていた。イエスはファリサイ人に言った。「あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか(ルカ14:5)」。つまり、命を救うことは安息日に優先していた。

安息日、イエスが会堂に入ると「片手の萎えた人がいた(マルコ3:1)」。ファリサイ人らもいて「いつものように癒したら訴えてやれ」と待ち構えていた(3:2)。「イエスは手の萎えた人に〔真ん中に立ちなさい〕と言われた(3:3)」。

続いてすぐに癒すかと思いきや、周囲を見回して彼らに問うた。「安息日に律法で許されているのは、善を行う事か、悪を行う事か。命を救う事か、殺すことか(3:4)」。

「彼らは黙っていた(3:4)」。ファリサイ人はなぜ答えに窮したのか。底意がバレたからか、自分に省みる事があったからか、「手が萎えている」苦しさなど眼中になく問いの意味が分からなかったのか。いずれにせよ、沈黙させられてイエスを貶める機会を逸し、改めて結託し直すことにした(3:6)。ファリサイ人は5~6人いたとして、「善か悪か、命か死か(3:4)」と問われた時、沈黙の中身は多様だったと思う。一人であれば悔い改めたかもしれない。しかし彼らは互いに牽制し合って元に戻った(3:6)。

ファリサイ人のような律法原理主義者は多くはない。一般に安息日はどう守られていたか。会堂長が安息日に癒すイエスに腹を立てて(ルカ13:13~14)、群衆を諭した。「働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらおうがよい。安息日はいけない(13:14)」。

「この女は~18年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか(13:16)」。

18年間も病んでいるのだし、今日の「休診日」ではなく明日以降にしてはどうか、という良識ではない。イエスにとっては、どんな病も緊急で、常に安息日に優先する。

会堂には、良識的な民が集い、頑ななファリサイ人、そして病を負った人がいた。イエスの問いで皆沈黙し(マルコ3:4)、場が緊張した。「そこで怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に〔手を伸ばしなさい〕と言われた。伸ばすと、手は元どおりになった(3:5)」。

ファリサイ人の底意に怒り、良識の頑なさを悲しみ、病者を御心で淡々と癒す。神を中心に据え直す安息日。だからこそ御心通りに病者は癒される。そしてキリストの怒りと悲しみで、私たちは「弾力」を回復する。

聖霊の息を吸って吐く かた時も疎かにすることはない その意味から 毎日が安息日とも言える
四季は巡り 教会では安息日が翌日に定められている 生きた現実では この瞬間々々が安息の時
8月は2箇所でおこなっている聖書研究会はお休みで、水曜日のカフェその他もお休みですが、メ
ディカル・カフェだけは開店しました。牧師の動き:教会に様々な人が来訪し、ダベリ、祈りました。

礼拝堂・集会所の住所: 408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ: 408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

eメールは komechan.olive@gmail.com HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。